

**<新刊紹介>阿部浪子著『本たちを解(ほど)く』 :
清新な風を吹き込む書評群**

著者	斎藤 秀昭
雑誌名	日本文学誌要
巻	59
ページ	95-95
発行年	1999-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020051

阿部浪子著

『本たちを解く』^{ほど}

清新な風を吹き込む書評群

斎藤 秀昭

本書は、平林たい子研究者として知られる阿部浪子氏が八九年十一月から九八年七月にわたって『信濃毎日新聞』(朝刊)に連載なされた千字書評九〇点を一冊にまとめたものである。副題に「小説・評論・エッセイのたのしみ」とあるように、文学作品のジャンルを問わず、読み巧者である阿部氏が「売れる本というより、読んでほしい本たち」に力点を置いてそれぞれの作品の魅力を解き明かしてくれている。

千字という字数の中で著者の紹介、大まかなプロットの説明、その作品の魅力などを凝縮して書くという行為は、想像するだけでも大変な作業かと思われるが、阿部氏も窮屈さや徒労感を覚えたという。しかし、阿部氏のそうした「逃げ

出したい」という苦悩の告白とは裏腹に、収録されている書評の数々は読後に清新な風が心を吹き抜けていくような瑞々しさに溢れている。逐一引用はしないが、阿部氏の文章は書評であると同時にそれそのものが優れたエッセイとなっているのだ。「著者がどう生きたか」「どう人生の危機を突破したか」「どういう日常をすごしているか」ということに関心を向けて本を解いているその筆致は躍動感に富んでおり、その本が読めて本当に良かったという阿部氏の喜びが直接に伝わってくる感じがする。

私は久しぶりにこのような書評に出会えて心が洗われるような思いがした。現在、文芸誌その他で見られる書評の中には、本の内容をダシにしてただ自説を展開しているものや、露骨に批判ばかりしているものがあり、そう極端ではないにしても、採り上げた本の優れた点を指摘し、世の中にそれを推し出すという書評本来の目的を果たしていないものが多々見られる。阿部氏の文章の中には難解な語句が一つもなく(私は辞書を引く必要を一度も認めなかった。広範に及ぶ新聞

の読者層を意識してのことではあろうが)、素直に書評の対象とした作品に向き合い、素手でその作品のモチーフやテーマを掴み出してくるという姿勢が一貫されている。そのことによって、なぜそれの本を阿部氏が薦めるのか、直に胸に伝わってくるのである。愛情を込めて本を紐解く阿部氏の誠実さや情熱の確かさは本物であろう。

また、文学研究者である阿部氏は「現代文学が追い求めているもの」や「時代がかかえている矛盾」をさりげなく指摘することも忘れてはいない。「ひとの心をしたたかに打ち、眠りこける感覚をたいてくる」作品への共感とともにそこから導き出されてくるものへの研究者としての目配りが効いた良き読書案内の書となっているのである。氾濫している書物の中から良書を選んで読みたい人にはぜひ阿部氏の本を参考にしていただけたらと思う。

(さいとう ひであき・博士課程一年)
▽一九九八年十月・ながらみ書房刊
一八〇〇円

△著者〓一九六六年卒